

継続した子育て支援を目指して ～ キッズ講座の開設と経過 ～

7-1 病棟 杉本ちえみ

I. はじめに

少子化や核家族化が進む現代は育児で悩んでいる親が多く、育児に対する支援が求められている。実際、入院中の母親達から病気の時の対処方法や育児の不安を耳にすることが多い。

当病棟では平成16年度より外来と連携し、患者サービスの一方法として育児に対する情報提供を行い、医療従事者の立場からの子育て支援を目的に“キッズ講座”を開設した。病棟のキッズ講座係が中心となり、企画・運営を進め、今年度で開設5年目を迎えたため、これまでの経過をまとめ、報告する。

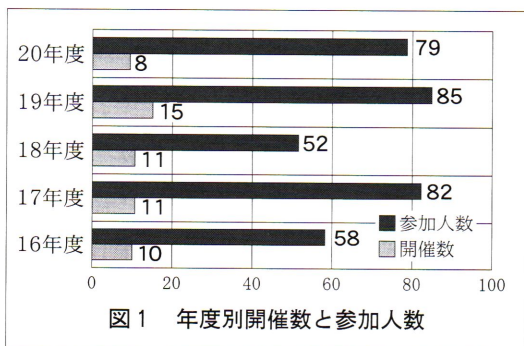
II. キッズ講座の目的

病棟スタッフなどによる子ども相談を患者サービスの一方法として実施し、医療従事者の立場での子育て支援を行うこと。また「幼児安全法短期講習会」を実施し、赤十字講習活動の普及に努めること。

III. まとめ

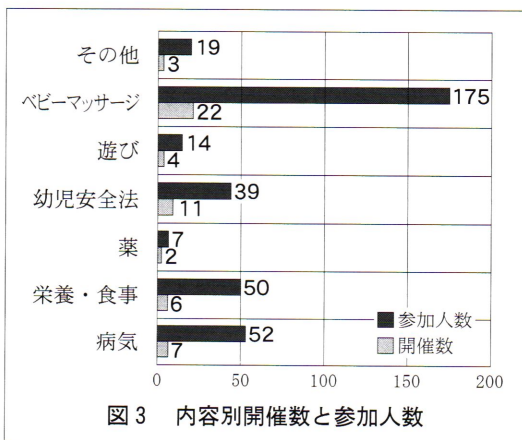
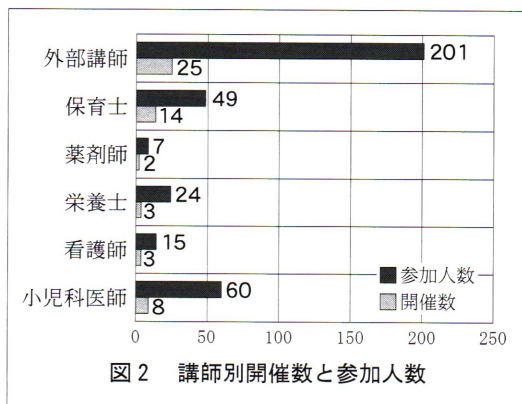
平成16年度よりキッズ講座を毎月1回開催してきた。

例年参加人数が2桁に届かない月も多く、参加人数を増やすことは毎年の目標である。そのため毎年インフォメーションの拡大を図り、キッズ講座を多くの人に知ってもらうよう努力した。



講師別に見てみると、外部講師によるものが開催回数、参加人数ともに一番多い(図2)。外部講師によるベビーマッサージを16年度より開催しており、19年度からは毎月開催している人気の高い講座である。

内容別に見てもベビーマッサージが開催回数も多く、参加人数も多い(図3)。またキッズ講座を開設した当初は幼児安全法を多く開催するなど講座内容に偏りがあったが、母親達のニーズに合わせて他部門と連携しながら充実した内容の講座を開くことができています。



IV. 考 察

開設当初から様々な内容で医療従事者の立場からの子育て支援ができた。特に、栄養士や薬剤師などの他職種に講師を依頼することにより詳しく、解りやすい講座を開催することができた。幼児安全法も毎年開催され、赤十字講習活動の普及ができています。

参加数を増やすことは毎年の目標であるが、多少ばらつきはあるものの、開設当初に比べ参加数は増加している。これは、キッズ講座を多くの人に知ってもらえるようポスターなどのインフォメーションを工夫したことや、母親のニーズに合わせた講座内容を企画できたからだと考える。

当院の乳がん検診の現状について

放射線科部 樋口 雅美 渡辺 友香

I. はじめに

近年の乳がん罹患患者数の増加に伴い、メディア等で乳がん検診のひとつであるマンモグラフィを取り上げることが多くなってきた。

当院では、平成18年3月、健診センター3階に乳がん検診専用のマンモグラフィ装置として、GE社製フラットパネルマンモグラフィ装置を導入した。通常のCRと違いフラットパネル装置であることから、検診者1人にかかる撮影時間の大幅な短縮ができる。その為、乳がん検診の待ち時間短縮にも繋がった。

今回、当院における乳がん検診の現状とマンモグラフィ施設認定について報告する。

II. 現 状

乳がん検診全体の件数は、この装置を導入前の平成17年度は1,756人だったのに対し、導入後の平成18年度1,961人、平成19年度2,631人と平成20年度1月までの集計では2,340人であった。

また、統計を取り始めた平成12年度と比較すると平成19年度の乳がん検診受診者数は約5.9倍となった。

乳がん検診で「要精査」となる割合は、平成19年度では全体の約13%であった。「要精査」となっ

た方をカテゴリー別にみるとカテゴリー5は4人、カテゴリー4は27人、カテゴリー3は346人となりカテゴリー3（良性、しかし悪性を否定できず）で要精査となる割合が大多数であった。

III. マンモグラフィ施設認定

マンモグラフィ装置の精度管理と撮影技術の向上を目的として平成20年5月、マンモグラフィ精度管理中央管理委員会が認めるマンモグラフィ施設認定を取得した。

当院の認定期間は平成20年5月1日～平成23年4月30日までとなっている。この施設認定は3年ごとの更新が必要である。次回の更新時も施設認定を取得できるよう技術の向上に努めたい。

IV. おわりに

マンモグラフィでは必ず乳房を圧迫して撮影をしなければならぬ。受診者は圧迫により強い痛みを感じる事が多いが、圧迫をして乳房を薄く広げる事により、乳腺の重なりが少なくなり画像のコントラストも向上する。さらには被曝線量も低減できる。ほんの数秒、痛みを堪える事でかなりのメリットが生じる為、受診者へ乳房圧迫への理解を求めていく事が重要と考える。